

第3章 マルクス降霊

◆ シーン 3-1 : 研究室

今度は「降霊じいさん」にマルクスを呼び出してもらって話をしたら、先生ったら、ますますおもしろがっちゃって、

「アッハッハッ。その「マルクス」が出てきたら、『今の自分をどうソーカツするんだ』って言ってやったら。」

「『ソーカツ』って？」

「…まあ、おわびの説明みたいなもんよ。マルクスって唯物論者で、神もあの世も霊もないって立場だったんだから、そりゃ、どういう了見でのこのこ出てきたのか、ちゃんと説明してもらわないとね。」

そう言うと、やにわに「そうだわ」と立ち上がって、
「そりゃぜひ、これに白黒つけてもらわなくっちゃね。」
と言って、乱雑な資料棚をがさごそ探す。

やがて、論文の抜き刷りを一つ探し出してきて、「これよこれよ」と指差して見せたところには、折れ線グラフの殴りがきのような画像があった。

「このこれが、『ニー』と書いてあるのか『ヌア』と書いてあるのかが論争になってるんだけど。」

「えっ？ これ『字』ですか。」

とても人間の書く文字とは思えないものである。

「マルクスの手書きの草稿よ。"nie"(ニー)ってのはドイツ語で『決してナニナニではない』って意味で、"nur"(ヌア)ってのは『ナニナニでしかない』って意味。文章の意味が正反対になっちゃうから、いったいどっちなんだってことで論争になってんの。」

「で、これを私に確かめてこいと…。」

「もちろんよ。『本人』に直接聞けるチャンスなんてそうないわ。『ついに決着！』って論文に書くから結果教えてね。」

先生、悪ノリのしすぎです。まったく、まじめに経済学史勉強したいだけのいたいけな少女を、大の大人が二人してからかってんだから。

◆ シーン 3-2 : 「祭壇」の部屋

とか思いながら、でも私も実は結構ノリノリでじいさんのところに出かけた。なんて反応するか楽しみ。

そしたら、インターホンで入ってくるように言われたから、「祭壇」の部屋まで進んで行ったら、「♪立てはらからよ、行け闘いに…」などと歌いながら、じいさんが赤いはちまきして、赤旗で祭壇をデコレーションしている。この人やっぱり絶対ヘン。

「おお、来たか来たか。」

「…って、そのTシャツなんですか。」

「ああこれか。知らないのか。ゲバラだよゲバラ。中南米の革命家で、ワシの若い頃ボリビアで処刑された。ワシらの若い頃は英雄じゃったよ。」

「てゆうか、マルクスと全然時代が合わないことだけはわかるんですけど。」

「ま、そういう細かいことは気にしない。今回の降霊は、こうやって革命精神を盛り上げていくことが必要なんじゃ。」

なんだかよくわからないけど、たぶん青春時代の血が騒いでるのね。例によって「マイナスイオン装置」を作動させて、「ありがとう」の水につけた櫛を振り回したら、いつにないハイテンションで、「ダンケツ、レントアイ、ケッシュー、ソーカツ、センメツ、トータツ、ジコヒハン…」と呪文を唱えだした。

そしておもむろにバツタと倒れ、しばらくたってからいきなり右手を突き上げながら、むっくりと、

「万国の労働者団結せよ！」

プロフィール

キターー!! 私はウィキペディアのプリントアウトを取り出して声をかけた。

「えー、カール・マルクスさんですね。」

「いかにも。」

「では、ご本人かどうかの確認をさせていただきます。」

「うむ。そうじゃろうな。ワシのニセモノはたくさんいるだろうからな。」

「まず生年月日と没年月日をお願いします。」

「生まれたのは1818年5月5日、子供の日じゃ。死んだのは1883年3月14日、

ホワイトデーじゃ。」

「それ両方とも日本にしかない日ですけど。」

「死んでから、千の幽霊になって世界中をうろついているからそれくらいのこととは知っとるわい。日本の製菓資本はワシの命日を祝って、反共産主義の白色記念日ということでホワイトデーをつくったのじゃ。まったくけしからん。」

「いやちがうと思います(苦笑)。なんか関係のないことで霊媒の怒りがこもっている気がしますけど…。では、いままで住んだところをお願いします。」

「生まれたのはドイツ西部のトリーア。大学は同じくドイツのボンとベルリンに行って、1843年からフランスのパリ、そこを追放されて1845年にベルギーのブリュッセルに移ったな。その後、1848年のヨーロッパ全土の革命のあと、イギリスに亡命し、その後ずっとロンドンに住んだ。」

「はい結構です。では主要著作を教えてください。」

「まあ、有名なのは1848年に生涯の親友のエンゲルスといっしょに出した『共産党宣言』じゃろうな。代表作はと言われれば、もちろん『資本論』。ワシが生きている間には、1867年に第1巻が出ただけで、第2巻と第3巻はワシが死んだあとエンゲルスが編集して出したものじゃ。…こんなもんで、信じてもらえたかな。」

「はい、結構です。」

って、もしホントだったら、こんなもんで全然本人確認にはならないよ。

今の自分のような「存在」もあるんだ…ってか!?

それはともかく、早速例のこと聞いてみよう。

「私のゼミの先生が是非尋ねろと言ってるから聞くんですけど、今のご自分をどう『ソーカツ』されますか。」

「フッフッフ。そうくると思った。こういう『存在』もあるんだよ。だいたいこういう質問は聞き飽きた。…そういえばレーニンっていただろう。」

「えーと、世界史で出てきたような気がします。」

「その程度かっ！ ワシが死んで30何年もたった1917年に、ロシアで『革命』と称して権力を握って、世界最初の共産党政権を作ったやつだ。ワシの思想の名を騙っておきながら、自分に反対する者を容赦なく弾圧して殺しまくったから、迷惑しとった。それで、バケて出ることにした。」

「はあ、バケて…出るんですか。」

「うむ。うらめしやーとな。」

「そんな日本語通じないと思います。」

「そしたら、そのとき速攻で言われたんじゃ。『今の自分をどう総括するのか』ってな。こんなこと言われたのは、そのとき初めてだったんで、言い返せなくて、スゴスゴ退散してしまった。」

「だめじゃないですか。」

「その後、レーニンが死んだら、スターリンというやつが独裁者になってな、こいつがまたヤクザなやつで、上から下まで全く無実の人々を見境なく逮捕しては、拷問にかけて殺しまくった。ちゃんと死刑判決が残っている者だけで約72万人じゃ。拷問で死んだ者やら酷寒のシベリアで強制労働で死んだ者を含めるとどれだけの人数になるかわかったもんじゃない。」

「ひどーい。」

「それで、やっぱりバケて出ようとしたんだが…」

「したんだが…って、やめちゃったんですか。」

「先客がわんさかいてな。殺された犠牲者がバケて出ようと長い長い行列を作っていた。さすがあの当時のロシア人は、物資不足で店の前で行列作って待つのに慣れてるだけあるわ。あんな忍耐力はとてもまねできないので、引き返してしまった。」

「そんなオチかつ！ じゃあ、今度はこれですけど。」

と、私は「nie・nur 論争」の抜き刷りを取り出した。

「このマルクスさんの草稿ですけど、ここの部分が”nie”と書いてあるのか”nur”と書いてあるのかが論争になっているのですが、どっちが正しいのでしょうか。」

「マルクス憑き」じいさんは、手書き文字の画像を見つめるや、あっさり、

「こんなもん、読めるわけないじゃろ。」

「でも、ご本人が書いたものでしょう。」

「もともと言語能力は霊媒のものになるって知っとるじゃろうが。しかもワシの字はワシ自身も読めんことがあるって、当時から有名だったんじゃ。『資本論』第2巻の序文でエンゲルスもそう書いとるから読んでみたらいい。こんな字を読みこなせるのはあの世でもエンゲルスしかおらん。」

「……。」

先生すみません「ついに決着！」はできませんでした。しかしもともと、しょせんはバブル世代の発想。百戦錬磨のじいさんにはとてもかなわなかったってことね。

**おカネもうけのために仕事
するのは「商品生産社会」。**

というわけで、私は経済学説のインタビューに移った。

「マルクスさんは、資本主義経済はケシカランって学説を唱えた人ですよ。ちょっと予習してきたんですけど、なんでも、お友達のエンゲルスさんが 1840 年代に出した『イギリスにおける労働者階級の状態』って本では、リバプールの労働者の平均寿命は 15 歳だとか、マンチェスターの労働者の子供は 57%以上が 5 歳にならないうちに死亡するとか書いてあるそうですね。『産業革命』っていうんですか、イギリスで世界で最初に工業化が始まって、それで生産物の量がいっぱい増えて、企業はどんどんもうけを出したのに、その陰で労働者達は、まだ子供のうちから毎日 10 何時間もこき使われて、狭い不衛生なところに押し込められて…、とってもひどいめにあってたんですね。マルクスさんは、こんなことが起こるのは資本主義のせいだということを分析したと…」

「まあ正確には『資本主義』とは言ってなくて、『資本主義的生産様式』と言ったんだが、まあそれはいい。現在と同じ意味でこの言葉を使い出したのは、ワシが最初じゃろう。」

「あのう…、そもそも『資本主義』って何なんですか。みんながおカネもうけをするためにお仕事をしている社会ということですか。」

「ちょっと違うな。どのみち市場経済だったらおカネもうけを目的にするもんじゃ。まあ正確には『商品生産社会』というべきだが。社会全体の中で分業してて、パンばかり作る業者とか、靴ばかり作る業者とか、鉄ばかり作る業者とかに分かれていてな、しかも、世の中全体でパンがどれだけ必要かとか、靴がどれだけ必要かとか、鉄がどれだけ必要かとか、みんなお互い知らないで仕事している。こういう世の中のことじゃ。こんな世の中では、とりあえず見込みで作ったものをあとから交換することになるから、それがスムーズに行くためには交換の仲立ちになるものが要る。それが『貨幣』。要するにおカネじゃ。こうなると、おカネがないと自分に必要なものが手に入らないから、みんなおカネもうけを目的にして仕事をするようになる。」

「昔からどこでもずっとそうだったんじゃないんですか。」

「うんにゃ、違うぞ。どんな世の中でも部分的にはそういう仕組みはあったけど、大昔の農業中心の世の中では、たいていのものは自分で自給自足しとった。ほら、お百姓さんの『百姓』ってのは、百種類の仕事ができるって意味じゃ。昔のお百姓は、自分が生きていくために必要なものは、たいてい自分で作ったり獲ってきたりできたんじゃない。こういう暮らしじゃ、おカネなんてあんまり要らないわな。ま、そんな時代がよかったとは思わんが。」

霊媒の言語を使うって設定はいいけど、やっぱりマルクスに日本語の解説をしてもらうってのは、どう考えてもへんだわ。

**世の中が支配するグループ
と支配されるグループに分
かれているのが「階級社会」**

「…で『資本主義』って、『商品生産社会』とは違うんですか。」

「いや、『商品生産社会』の一種だな。市場経済でも、一人一人がみんな独立の自営業者のような世の中を考えてごらん。こういうのは『単純商品生産社会』と言うんじゃないが、『資本主義』ではない。まあ、アダム＝スミスなんか考えておったのは、主にこういう単純商品生産社会みたいなイメージじゃろう。資本主義社会は、そんな単なる商品生産社会ではなくて、『階級社会』でもある。」

「『階級社会』って、よく言う『格差社会』のことですか？」

「いやいや、商品生産社会ならば競争があるから、成功して羽振りのいい者とうまくいなくて貧乏するものの格差くらいはでるもんじゃない。しかし、「階級」というのは、そんなことを言ってるわけじゃない。世の中が支配するグループと支配されるグループに分かれていて、支配されるグループの者は支配するグループの者の言いなりになって働かなければならない。こういうのを階級社会と言うんじゃない。これは資本主義だけではない。例えば封建社会も階級社会だな。江戸時代までの日本もそうじゃ。領主様が支配階級で、農民はその言いなりになって働かなければならなかった。」

「どうしてそんなこと知ってるんですか。幽霊になって日本に飛んでこれるようになったころには、もう明治維新が終わってると思いますけど。」

思わずつつこんじゃったけど、じいさんひとつも慌てず、

「生きてるときに日本のこともちょっとだけ勉強したんだよ。…ともかくだ。」

階級社会では、支配階級は被支配階級の者を働かせて、あがりをブン取っていくことになる。それは、社会公共のために使われるかもしれないし、支配階級の者のぜいたくに使われるかもしれない。でもどっちにしろ、支配階級の者の決めた通りに使われる。被支配階級の者は、一生懸命働いてそれを生み出した当の本人なのに、その決定に口出しすることはできない。こういうのを『搾取』と言うんじゃ。江戸時代の日本でも、農民は『年貢』って取られとっただろ。あれが搾取というもんじゃ。」

資本主義も階級社会。よって「搾取」がある。

出た！「サクシュ」。なんか言葉の響きでは、不当にかすめとったもので飲めや歌えの浪費をするってイメージがあったけど、必ずしもそうでもないのね。

「じゃあ、今で言う『税金』も搾取なんですね。」

「うーむ。そりゃ、民主主義がどれだけちゃんと機能しとるかという問題だわな。民主主義がちゃんと機能していて、民衆が自分に恩恵が返ってくるように税金の使い道をコントロールできているときには、税金は『取られるもの』ではなくて『預けるもの』という感覚になるじゃろう。そうしたら『搾取』ではない。でも、民主主義がうまく機能していなくて、税金が納得なく『取られるもの』という感覚になっているならば、それは『搾取』じゃな。」

「そしたら、現代のこの社会では、政治がちゃんと民主主義になっていれば、搾取はなくなるということですか。」

「いやいや、そうはいかないのが資本主義というもんじゃ。資本主義社会も階級社会だと言ったじゃろう。やっぱりその点では封建社会と同じじゃ。支配する者と支配される者がいる。支配階級が『資本家』、被支配階級が『労働者』というわけじゃ。」

「『資本家』って、社長さんとかのことですか。」

「…まあ、それでいいな。詳しいこと言い出すと難しい問題がいろいろあるが、まあ、このレベルではそんなイメージでよかろう。でだ。社長と労働者では上下関係があることは誰でもわかるよな。社長はいばってるし、労働者はへこへこしなければならぬ。だけどじゃ。資本主義社会も商品生産社会の一種だということをお忘れんでほしい。商品生産社会では、取引の参加者はみんな自由対等だということが原則になつとる。」

「自由対等…ですか。」

「そうじゃよ。マクドナルドでは、大臣でも貧乏学生でも、客に対する対応はみんな同じじゃろう。百円で買えるものは、身分にかかわらず誰でも同じじゃ。自由・対等・公正！資本主義経済も商品生産社会だということは、資本家と労働者の間の階級関係も同じじゃ。自由対等な商品取引だという形式をとって現れるわけじゃ。つまり、労働者が資本家に『労働力』という商品を作り、その代金として、資本家が労働者に賃金を支払うという商品取引だな。土木作業員もアルバイト店員も勤務医も大学教授も、こうやって労働力を売って暮らしているから労働者じゃ。本当は社長と平社員では上下関係があることは誰でも知ってるのに、法律で認められた形式じゃあ、自由で対等な商品取引でござーいってことになっちまってる。」

「でももともと力関係が全然違いますよね。」

「そう。資本家はある業界で業者が多すぎてもうからなくなったら、早いうちに撤退して別の商売を始めればいい。けど労働者は違う。圧倒的な多くの者は、脱サラして昔のお百姓さんみたいに自給自足しようにも、土地を持っていない。自分で商売始めようにも元手を持っていない。結局、雇われ稼業以外できない身なんじゃ。」

対等・公正な取引でも搾取が発生する。

「で、その足下見て賃金削って搾取するって案配ですか。」

「いやあ、まあ結果的にそうだとすると、そう話は単純じゃないんだな。商品取引だということは、あくまで『自由対等』ということになっておる。だから、賃金も対等公正に等価に支払われることになっておる。まあ現実には不当に叩いて切り縮めた賃金で働かされることも大いにあるけどな。でもそれは特別悪いケースとしてわきにおいとこう。とりあえず対等公正に支払われるとして、だとしても搾取があるんじゃ。」

「対等公正なのに搾取ですか。」

「そのとおり。生産するのにかかった労働通りに交換ができれば、まあ、対等公正な取引と言えるわな。労働力も、メシ食ったり服を着たりして生産するもんじゃ。だからメシやら服やらの生活物資を作るのにかかった労働どおりに賃金が払われたら、そりゃ公正な等価交換と言えるじゃろ。ところがじゃ。実際

に資本家に雇われて働く労働の量というのは、それとは全然別もので関係ない。労働力作る物資を生産するのにかかっている労働よりも、もっと多くできる。」

「ああ、『労働力』と『労働』は違うのか。労働者が売ってるのは消費財から出来た『労働力』で、実際働かされるのはそれとは別物の『労働』。だから対等公正な等価交換なのに、支払ってもらった労働より、もっと余計に働かされてもおかしくない。これが『搾取』だというわけですね。」

「そうじゃ。」

…うーむ。なんだかこの理屈、だまされたような気もするけど。

「その余計に働かされた労働を、ワシは『剰余労働』と呼んでおる。そしたらじゃ。その資本家が商品を売るときも、対等公正に、かかった労働通りの等価交換で支払いを受けるならばどうなる。そうやって労働通り支払われた収入と、賃金として払った分、つまり労働者の生活物資を作るのにかかった労働の分との間に差が出来て、それが企業のもうけ、利潤になる。つまり利潤の正体は労働者から搾取した剰余労働と言うわけじゃ。この利潤で資本家は、新しい工場を建てたり自分のぜいたくに使ったりと、いろいろ好きにするけど、本来それを生み出した労働者は、そんな使い道に一切口を出すことができない。」

「ああ、江戸時代の領主が農民から年貢を取るのと同じなんですね。」

「ただ何度も言うが、資本主義社会は商品生産社会だから、形式的にはそんなことは現れないんじゃ。あくまで、自由・対等・公正という形式をとる。だから、労働の正当な見返りが賃金とみなされるし、同じように、出資の正当な見返りが利潤とみなされるわけじゃ。」

**自営業者の所得は「利潤」
ではない。**

「なるほど。そうすると、資本主義経済では、会社がみんな、こんな利潤を追求するもんだから、搾取がひどくなって、労働者をなるべく安い賃金で長時間こき使うようになるというわけですか。…ちょっと念のために確認ですけど。私なんか『利潤追求』と聞いたら、会社の従業員が給料が上がるようにがんばって働くとか、自営業者がもうけを追求するとかもイメージしちゃうんですが、これは全然違うんですね。」

「そう、全然違うね。『利潤追求』と言うときの、一番文句のつけようのないイメージは、株主にあげる配当を増やそうとすることじゃ。商売するのに必要な

元手のことを『資本』と言うが、その資本の規模が二倍になったら二倍になるのが利潤じゃ。働いた量とは関係がない。従業員が給料が増えて『もうかった』とか、自営業者が『もうかった』とか言うのは、『利潤』とは言わない。」

「だとすると、単純商品生産社会ってさっき出てきましたよね。みんな自営業者ばかりの市場経済。これは、商品生産社会には違いないけど、資本主義と違って、階級も搾取もないってことになりますよね。これだったらいいとマルクスさんはお考えですか。」

「いやいや全然そんなことは思わんわい。そもそもじゃ、単純商品生産社会なんてもんは、商品生産社会の本質を分析するための理論モデルにすぎん。現実にはあり得んのじゃ。大衆がめいめい自分の農地や作業場を持ってたんじゃ、ある程度のものは自給できてしまう。本当に何もかも全面的に商品取引されるためには、働く大衆がみんな、賃金をもらってそれでもって必要な消費財をヨソから買うようにならんといかん。だから、資本主義になって、はじめて商品生産社会は全面的に完成するんじゃ。だいたい、資本主義みたいに大工場で人を雇って集団で組織だって生産した方が、個人個人で独立して生産するより、生産力も高いし効率的じゃ。商品生産社会で市場競争したら、独立自営業者なんか負けるに決まっとる。やがては結局資本主義社会に行き着くじゃろうて。」

不均衡な変動を長期的にならして見ると均衡するのが市場メカニズム。

「そうするとマルクスさんは、やっぱり市場メカニズムはダメだと。スミスさんやリカードさんと違って、市場にまかせても、世の中のいろんな欲求と、いろんな会社の作った生産との間でバランスが取れなくて、売れ残りとか品不足とかが起こって、失業やら倒産やら物価高やらでみんな苦しめられてしまうと、そうお考えなんですね。」

「半分は正解。半分はブーだな。」

え？ またなんだかわけわかんないことを…。と思っていたら、顔に出たみたい。

「ハッハッハ…理解に困っとるな。資本主義市場経済では、あるときは景気が過熱して全般的に需要超過、つまりみんな品不足になる。けど、別のときには、『恐慌』と言ってな、ドーンとひどい不況に落ちこんじまう——そしたら全般的に供給超過、つまりみんな売れ残りじゃ。それに、あるときにはある業界が

もうかるけど、別のときにはまた別の業界がもうかる。…とかなんとかと、こんな変動を延々繰り返すわけじゃ。そうすると、長い目で平均して眺めてみたらどうなる？」

「変動をならして見るわけですか…。」

「そう。売れ残りも品不足も相殺されて、部門ごとのもうかりかたの違いも相殺されて、世の中の欲求と生産がつりあった均衡が実現されることになる。これをもたらすという点では、たしかに市場メカニズムはスゴいぞ。昔の王様やら殿様やらは一生懸命経済を命令でコントロールして調和をもたらそうとしたけど、こんな芸当はできやしなかった。こういう長い目を見たタイムスパンでは、スミスやリカードの主張が成り立つというわけじゃ。」

「でももっと短い目で見たらそうではないと。」

「そのとおり。この均衡というのは、スムーズに落ち着いた先じゃない。変動の平均なんじゃから、現実にはどの瞬間にも均衡していることなんかない。永遠に均衡には落ち着かんのじゃ。だから、現実の、不況だとか好況だとかのそれぞれの場面を見ている時には、スミスやリカードでは間にあわん。特に恐慌の時はそうだな。スミスやリカードの考えでは、貨幣なんて交換の仲立ちにすぎない、経済に影響しない『ベール』みたいなものとされてたけど、恐慌の時には、『カネ払えー！』って借金取りが押し掛けて、みんなおカネが必要になる。とてまただのベールですまなくなる。そのときには、『貨幣こそ富』と考えていた重商主義の理屈があてはまるようになるんじゃ。」

「つまり、市場メカニズムはバッチリ働くんだけど、それは人々をひどい目にあわせながら働くんだけどというわけですね。それでも、近代以前の昔みたいに政府が経済を管理しようとしてたときよりはマシだと。」

資本主義は世界を普遍化した。

「まあ、それでいいかな。市場メカニズムだけでなく、資本主義というものの自体がそうだと思う。資本主義こそ、科学技術を推進し、生産力を発展させ、因習を崩し、暮らしと仕事の連鎖を世界中に広げ、民族的頑迷を壊し、文明を世界中に広げ…」

「なんだか資本主義礼賛になってきましたね。」

「おうよ！ワシの『共産党宣言』読んでみるがいい。ある意味、資本主義礼賛

の書じゃよ。『普遍』って言葉わかるかね。英語で「ユニバーサル」。『誰にでもあてはまる』ってことじゃ。資本主義は世界を普遍化したわけじゃ。でも、人々をひどい目にあわせながらやったわけじゃ。イギリス産の安い大量生産品で、民族の伝統が壊され、機械化で職人は仕事がなくなり、みんなイギリスのスラムの労働者と同じ、ギリギリ生きてるだけのすっかんぴんの単純労働者になっちゃった。そりゃ犠牲者は山のように出た。ケシカランことじゃ。でもこのおかげで、近代以前の昔の社会より世の中進んだんじゃ。」

「搾取」とは、弱肉強食の悪意の産物なのではない。

「そうすると、マルクスさんは、市場や資本主義を批判することにかけては誰にも負けないかもしれないけど、やみくもに何もかもそれを否定しているわけではないと…」

「同じ資本主義批判と言っても、ワシと同時代の社会主義者のやったやつは、ろくでもないのばっかりじゃったからな。プルドンなんか、『財産は盗みだ』とかほざいて、大資本の利潤ちゅうのは不等価交換でだまし取ってきたものだと言っとったもんじゃ。エンゲルスのやつがさんざん手を焼いたデューリングとか言う野郎もそうじゃ。この世の不正の基本は、強者が弱者を力で食べ物にするモデルで説明できるとか言っておった。資本主義の利潤も、買い手の足下を見て供給を抑えて値段をつり上げることから生まれると見ておった。」

「マルクスさんの搾取論はそういうのと違うのですか。」

「全然違うわ！ そりゃ現実の短い目を見た世界では、詐欺みたいな取引も、価格つり上げも、弱肉強食もいっぱいあるわさ。でもそんなんは、いつも誰かが必ずやっ取るかも知れんが、長続きはせん。市場経済っちゅうもんはな、長い目で見たら結局、対等公正な取引が残るもんなんじゃ。競争が働く以上、長い目で見れば、特別トクする者もないし、ソンする者もない。使用価値で見れば、取引当事者双方ともにトクをする。資本主義の恐ろしいところはな、誰の悪意でもない対等公正な取引で、搾取が生まれるシステムになっ取るということじゃ。例えば、あんたが資本家だとして、従業員をあわれに思ってヨソと比べて給料を二倍にしたらどうなる。」

「…競争に負けて会社がつぶれますね。」

「そういうことじゃ。それだけじゃないぞ。資本家がみんな慈悲深くなって、

費用を除いた収入をみんな賃金にして労働者に分配していたとしよう。とりあえず搾取はなしじゃな。ところがそこで資本家達が、銀行から借金して、新しい工場を建て出したとしよう。するとどうなる？ インフレになって賃金が目減りするんじゃ。これを裏から説明したらこうなるぞ。——機械や工場を作る労働者が増えるわけだから、彼らの食べる消費財の分、なんとかしなきゃいかん。だから、消費財を作っている労働者が余計に働くことになるか、労働者各自の手にする消費財の量をそれぞれ減らすか、そのどっちもか。…これはすなわち、労働者みんな、搾取が発生してしまうということじゃ。別に、賃金ケチるだけが搾取じゃない。誰の悪意でも陰謀でもなくて、いつの間にか物価が上がって搾取が高まっているということもあるんじゃ。こんなことを考えるためには、プルドンやらデューリングやらみたいな見方じゃあダメなんじゃ。」

「マルクス憑き」じいさんは、人差し指を立てて振り回して熱弁はじめた。どうも、資本主義側を批判するよりも、同じ資本主義を批判する側のライバルの悪口言うほうが、熱がこもるみたい。

「『搾取』っちゅうのはな、ひとつの会社のなかで利潤と賃金の取り合いをするとか、自営業の職人さんが大企業に製品を買いたたかれるとか、そんなレベルの話をしとるわけではない。世の中全体で働いている労働のうち、どれだけの割合が労働者向けの商品の生産に就き、どれだけの割合が資本家向けの商品の生産に就いているか、その割合がどう変化するかという問題なんじゃ。これを考えるには、リカードの古典派経済学の考え方でやらないといかんのじゃ。だからワシは、リカードを徹底的に勉強して、それを引き継ぎ、その矛盾した所を正して筋を通して完成させたわけじゃ。」

「ああ、スミスさんとかリカードさんとかの古典派って、みんなだいたい市場礼賛で、利潤追求OKいいことだって言ってるから、てっきりマルクスさんは嫌ってると思ったけど、結構評価が高いんですね。」

「スミスやリカードはな。もちろんワシや批判もしとるぞ。でも引き継いだことの方が多。じゃが、古典派の亜流は別だぞ。シーニアとかユアとか、名前を出すだけで口が汚れる俗流が、古典派の名を汚しとった。一日十何時間もあゝる児童労働をちょっと短くしたら、その分の時間子供が怠け癖がつくから教育上悪いとかとんでもないことを言っとったやつじゃ。市場取引は元来弱肉強食じゃないぞというのが古典派の自由主義の主張なのに、弱肉強食する自由を求めることが自由主義だと思ってるやつじゃ。」

労働価値説と費用で決まる
価格理論とをリカードから
引き継いで徹底した。

「リカードさんから引き継いだものって、やっぱり一番は労働価値説ですか。」

「いろいろ引き継いだけど、一番と言えはたしかにそうじゃろうな。リカードには賃金理論で労働価値説を徹底してないところがあるから、それを徹底させたらさっきの搾取論が出てきたという感じじゃな。」

「リカードさんは、商品の価格は均衡で見ても投下労働価値からちょっとズレると言ったんですけど、それについてはどうですか。やっぱり投下労働価値どおりになるんだって言って徹底したんですか。」

「いやいや。逆じゃよ。ちゃんとどうズレるか計算して出して、『生産価格』って名付けた。むしろリカードの方がその点いいかげんで、たいしたズレじゃないから投下労働価値どおりで説明していいだろうって言って話を進めたんじゃが、ワシはそこはきっちり筋を通して、地代論にしる何にしる、資本主義経済の市場で決まることの説明は、全部生産価格でやってるぞ。」

「リカードさんの場合は、自然価格って言いましたっけ、それと『生産価格』は同じと見ていいんですか。」

「まあ基本的に同じことだな。賃金も含む生産コストに、どこの部門でも同じくらいもうかる均等利潤率の分の利潤を足し上げて決まる価格じゃ。」

「じゃあどっちにしる、やっぱり1個作るのにかかるコストに比例する価格ってわけだから、供給側の要因だけで決まる価格ってことで、その点では投下労働価値どおりの価格と同類ですね。」

「そりゃそのとおりじゃ。」

「あの一、ひとつ疑問に思ったんですけど、さっき搾取の話をして下さったときは、『一番公正な投下労働どおりの交換だったとしても』って、『だとしても論理』で投下労働価値価格を前提して説明されましたけど、この話って、労働価値価格じゃなくて、生産価格になっても本当にあてはまるんですか。」

「そりゃ大丈夫じゃ。『総計一致二命題』ってのがあってな、ワシは証明の完成まではできなかったのじゃが、簡単な近似計算では成り立つことを確かめてあるぞ。この二命題が両立するかぎり、利潤の正体が搾取された剰余労働だということばっちり言える。」

証明の完成はできてない…って、ホントに大丈夫かなあ。ちょっと心配。

未来社会のイメージは、国有・指令経済ではない。

おっともうそろそろ時間だわ。じゃあ最後に、

「マルクスさんは、資本主義の世の中はやがてうまくいかなくなって、革命で倒されてしまうとおっしゃっていたようですが、それはやっぱり、このままいくとどんどん搾取がひどくなって労働者がみんな耐えられなくなるからってことですか。」

「うーむ、ちょっと違うなあ。単にうまくいなくなるってだけでなく、逆に、資本主義のおかげで次の社会の条件がもたらされたからってこともある。ほら、資本主義市場経済は、長い目でならして見たら、社会全体のバランスのとれた仕事の配分とか、自由・対等・公正な人間関係とか、生産力の増大とか、世界の普遍化とかをもたらすと言ったじゃろ。この点はどんどん発展していつ、次の新しい社会のモトを現に作っているんじゃ。これを忘れちゃいかん。だけど、資本主義では短い目で見たら、不均衡な景気の波とか、不正な弱肉強食とか、そんな正反対の歪曲がいつも起こって、その歪曲の変動を長い目で平均してはじめて、長期的なプラスの傾向が成り立つもんだ。この短期的な歪曲が、だんだんひどくなってきたとワシは見たんじゃな。それが、『うまくいなくなる』ってことの意味じゃ。」

「そうすると、その資本主義なら長期平均的にやっともたらされるものを、短期的な歪曲がないようにばっちりクリアーに実現するために、政府が経済全体を管理しましょうと。それで会社を全部国有化して、経済計画立てて上から指令してやっていこうと。こういうことになるわけですか。」

「いやそんなことは考えとらんわ。そういうことを言っとったのは、バブーフとかサン・シモンとかブランキとかがおったな。国家権力を奪取して、産業国有化して、エリートが上から合理的に管理して、みんなに貧困のない平等な暮らしをもたらそうという流れじゃ。こんなもの、一部の者の独裁に墮落するに決まっとる。まあ、ワシが死んだあとロシアで権力を握ったレーニンとかの連中もこんなイメージで世の中を作ろうとしたけど、案の定、一部の者の腐敗した独裁になっちまったわい。」

アソシエーションの未来社会像と、それが可能になった理由。

「じゃあ、マルクスさんの未来社会のイメージはどんなのですか。」

「ワシの考える未来社会を社会主義とか共産主義とかと言ってもいいんじやが、ワシ自身はあまりそうは呼んでなくて、たいていは、アソシエーションとか協同組合的社会とかと呼んでおる。自立した自由な労働者個々人が協同組合を作って工場を民主的に運営して、そういう協同組合が社会全体で連合して調整しあうというイメージじや。」

「ふーん。働く人が自分達で民主的に会社を運営するって、なんかとっても魅力的に聞こえますけど、…ぶっちゃけ、ホントにできるのかなって気もします。どうしてこんなことが可能になったとお考えですか。」

「そこじや。封建時代とかの民衆は、ムラごとに風俗も価値観も違っていたし、各職業や身分ごとにもバラバラじゃった。話し合っ合意をつけるなんてとてもできん。けど、世の中全体は秩序立ってまわしていかんやならん。仕方ないから結局、誰か上に仕切る人々が出て、下々の者がその命令を一方向的に聞いて世の中まわすしかない。だから、王侯貴族が支配階級になる階級社会がやめられなかったわけじや。資本主義でも、まだ職人の熟練に頼っていた頃は、職人どうしは自分の狭い奥義の世界に閉じこもっていて、話し合っ合意をつけるなんてできんかった。だから、有無を言わせず上から工場を仕切る人が出てくる。資本家の階級支配がどうしても必要だったわけじや。」

ところが、資本主義が発展すると、さっきも言ったように、世界が普遍化される。みんなの生活条件が同じになる。特に、機械化が進んで、熟練が要らなくなっみんな同じ単純労働者になる。しかも、しょっちゅう配置転換させられたり、景気にあわせてクビにされては、いろんな職場を渡り歩かされる。だから労働者はいろんな仕事を経験する。子供達も、どんな職業でも利用できるように教育される。それに、食べる物も着る物も、生きていくギリギリの大量生産品で、みんな同じだ。だからこそ、労働者達はみんな、お互いの労働現場や生活のことが簡単にわかりあえるようになる。もう、支配階級に上から仕切ってもらわなくても、自分達で話し合っ合意をつけることができるようになったというわけじや。」

「マルクスさんが主に見ていたのは、19世紀当時のイギリスですよ。最先進

国だったそうですけど、当時工業化が進んで産業の中心だったのは…」

「繊維産業、特に綿工業じゃな。女子供がいっぱい働かされてた単純労働の世界じゃ。」

ああなるほど、理屈はわかるわ。でもそうしたら、その後 20 世紀の先進国みたいに、重工業化が進んだところでは、またいろんな熟練労働者や複雑な事務職員が要るようになる。そしたらこの理屈はあてはまらなくなっちゃわない？ …という気もするけど、とりあえずここはやりすごしとこう。

過渡期の手段としての国家権力の利用。

「わかりました。じゃあ、会社を国有化したりするというイメージは間違ってたんですね。」

「いや、間違いとも言えん。アソシエーションとか協同組合とか言ってたのは、別にワシの専売特許じゃない。フリーエとか、ワシのライバルじゃったブルードンとかもそういう主張じゃった。中年の頃のライバルじゃったバクーニンも似たようなもんじゃな。古くはイギリスのオーエンもいたな。みんな働く者自身が自治する事業体を、身近なところで作っていこうという志向じゃった。それによって、雇われ人の従属人生を脱し、個々人の自由を実現しようというわけじゃ。けどな、そんなことを資本主義のただ中で部分的にやっても失敗するだけじゃ。さっきも、搾取とは経済全体での仕事の配分の問題だと言ったじゃろ。経済全体を調整せんことには、搾取の問題も何も解決せん。だから、世の中はまず全体的に変えないといかん。」

「じゃあ、どうすればいいとお考えでしたか。」

「だからじゃ。労働者が革命で政治権力を握って、一旦革命政権が産業を国有化するわけじゃ。そして、革命政権が資本主義経済を協同組合的な経済に作り替えていくにつれて、経済の運営も、だんだん現場の自治とか、当事者どうしの調整に委ねられていって、やがて国家は政府ともども不要になって消え去るというわけじゃ。こういう過渡期の革命政権のことをワシは『プロレタリアート独裁』と呼んだ。」

「なんだか恐そう。一番上のリーダーが独裁者になって、反対するものを死刑にするみたい。」

「まあ、歴史の過程の中では往々にしてそんなことも起こってしまうかもしれ

んが、あらかじめそんなことを提唱したり目指したりしたらいかんな。ここで言っている『独裁』ってのはそういう意味じゃない。だいたい、『プロレタリアート』ってのは労働者のことだから、何百万人、何千万人というわけで、そんな多数者の支配が、個人独裁と相容れるはずはない。あくまで、リコール付きの普通選挙や自由立候補のある徹底的に民主的な代表機関の支配を意味しているんじゃない。」

「じゃあ、『独裁』なんて言わなければいいのに。」

「イメージ悪いから『執権』に変えようとか…って、そんなわけにはいかんのじゃ。ここで『独裁』と言ってるのはな、当時のイギリスの立憲政治を念頭においておって、それと正反対のものという意味なんじゃ。当時のイギリス政治は、慣習法が支配していて、内閣だろうが議会だろうが、勝手にそれを動かすわけにはいかんかった。しぼりのある、何もしてはいけない国家だったんじゃ。それと正反対で、民意を民主的に反映するがゆえに、何でも決めて意のままに実現できる国家という意味で、『独裁』と言っとるんじゃない。」

「ふーん。それはわかりましたが、でも、千人規模ぐらいならともかく、何百万人も人の間でちゃんと正しく情報をやりとりして、民主的に民意を反映してものごとを決めるというのは、とっても難しい気がしますけど。間違った決定で取り返しのつかないことに転がり落ちてしまうこともあるんじゃないですか。そうだとすると、やっぱり簡単には変えられないルールの縛りって、ある程度は要るように思うんですけど。」

「うっ…も、もう時間じゃ、戻らなきゃ霊媒の命にかかわる。さらばじゃ。」

おいおい。そういう終わり方かい！

じいさんはぼったり倒れ、やがておもむろに起き上がって例によって「ここは誰じゃ」などつつぶやいている。はいはい。

◆ シーン 3-3 : 再び研究室

翌日早速「マルクス降霊」の報告をしたら、先生はさんざんおもしろがって聞いたあとで、

「やっぱりそのじいさんただ者じゃないわ。」

「えっ？ とうとう降霊信じたんですか。」

「そうじゃなくて」

「先生の考えた突っ込みの、かわし方がたいしたもんだとか。」

「そうじゃなくて。マルクス理解がただ者じゃないって意味よ。二日や三日で準備して仕入れた知識じゃないわ。」

と、遠くを見る目を爛々と輝かせる。

どんな価格でも成り立つ搾取の証明がなされている。

やがて視線を私にもどして、

「で、何か聞いていて疑問に思ったことはある？」

私はメモをたどった。

「えーと…。例の『搾取』の説明なんですけど、『労働力』と『労働』が別という理屈がなんかだまされたような気がして。何か自動車生産するときのコストとか牛に餌やって育てるコストみたいに、人を生産するコストを考えて、それで賃金が決まるのが『対等な等価交換だ』とか言われても…」

「例えば全く同じ織布労働をしても、独立自営業者としてやったら労働まるまる分払われるのに、雇われてやったら労働力の分だけしか払われないのが等価交換だというのはやっぱりへんよね。…でも気にしなくていいわ。今では、こんな無理矢理な理屈を使わなくても、利潤の背後に労働の搾取があることは証明されているから。」

「そうなんですか。」

「もう、価格が投下労働価値どおりかどうかなんてのも関係なし。生産価格である必要もなくて、とにかくどんな価格でも、利潤が出ていたらその背後に必ず労働の搾取があるのよ。それは、日本の置塩信雄という人が1955年に世界で最初に数学的に証明していて、『マルクスの基本定理』って呼ばれてる。」

「そしたら、あの…『総計一致二命題』が両立するという証明が完成してないって話がありましたけど、それがホントに成り立ってるかどうかにかかわらず、もう、利潤があつたら搾取があるって話は言えてしまっている。」

「そうそう。『総計一致二命題』ってのは、経済全体での全商品の総生産価格＝総投下労働と、総利潤＝総剰余労働とが同時に成り立つって話だけど、実は残念。これは成り立たないってことが証明されちゃいました。その点ではマルクスは間違っていたわけ。でも、『マルクスの基本定理』が成り立つ以上、こんな

ものは成り立たなくてもちっともかまわないわけよ。」

三つの軸からのまとめ

「じゃ、例によって、今回のまとめだけど、まず『市場肯定派か市場批判派か』という軸はどうか。マルクスはどっちだ。」

「一応、市場批判派ですよ。もっとも、長い目でみたら平均的に均衡をもたらすって言うから、必ずしもそう言い切れないところがありますが。」

「でも、それをはた迷惑な暴れ変動を通じてもたらすとみなしているわけだから、肯定しているわけじゃ決してないよね。将来のアソシエーション社会では、市場はなくなって、諸個人みんなによる調整に取って代わられるとみなしてもいる。」

「そんなことできるのかなあ。」

「単純労働者ばかりで、みんな生きてくのがやっとのカツカツの同じような消費をした時代だから、生活に必要な物資なんて単純に計算がつくとみなしてたんじゃないの？…そしたら、次。『経済学的発想か反経済学的発想か』という軸の方はどう？」

「ブルードンやデューリングは『反経済学的発想の市場批判派』みたいですね。利潤というのは、力の強い者が不正な取引で力の弱い者を食い物にして取ってきたものだという発想。他方で、シーニアやユアは『反経済学的発想の市場肯定派』みたいですね。弱肉強食の自由万歳って感じ。マルクスはこの両方に反対して、『経済学的発想』を打ち出しているのだと思います。搾取というのは、誰か力の強い者の悪だくみの結果なのではない。取引というものは、原則としては、当事者がみんなトクをする対等・公正なものなんだけど、その背後で、誰が意図したわけでもない自動的な仕組みで、搾取というものが発生するんだという考えですよ。」

「そうね。じゃあ、『創始者か総合者か』という軸はどうか。」

「えーっと、マルクスって言ったら、革命を唱えた人ですから、経済学説でも革命的な説を唱えた『創始者』みたいなイメージがあったんですけど、違いましたね。基本的にリカードの経済理論を引き継いでました。」

「まあ、ある意味丸飲みって感じよね。」

「リカードの不合理なところを直して、体系を完成させたんだと思いました。そうやって古典派を引き継いで完成させたんですけど、それが成り立つのは長

い目でならして見たときで、短期的には重商主義があてはまると言っていました。古典派がスタートしたときにスミスが否定した重商主義を、改めて取り入れて、古典派と総合させたということだと思います。だから、マルクスは『総合者』ですね。」

「そうね。…しかも、マルクスが総合者だというのはそれだけではない。」
先生はそう言うと立ち上がって、ホワイトボードに図をかきだした。

**「三つの源泉」それぞれの、
二潮流を総合している。**

「レーニンが言っているマルクス解釈は、たいていは賛成できないことばかりなんだけど、ひとつだけその通りだと思うことがあるわ。それは、マルクス主義には『三つの源泉』があるってこと。イギリス経済学、フランス社会主義、ドイツ哲学の三つね。そしてこの三つともで、マルクスは『総合者』になるのよ。…イギリス経済学はいいわね。今言ってくれたとおり。古典派経済学を引き継ぎながら、それ以前の重商主義と総合している。フランス社会主義についても昨日じいさんの話にでてきたみたいね。」

「え？ ああ、なんかありましたね。…えーと、メモ、メモ。あっそうか。バブーフ、サン・シモン、ブランキみたいな、産業国有化して政府が経済管理しようという流れと、フーリエ、プルードン、バクーニンみたいな、個々人が自治する事業体を下からつなげていこうという流れ。」

「前者を、そうね『国有化派』と呼ぼうか。目指すのは『平等』。後者を『アソシエーション派』と呼ぼう。目指すのは『自由』。マルクスは基本的には『アソシエーション派』のビジョンを引き継いでいるんだけど、革命時の過渡期の手段として『国有化派』の考えを取り入れているわけよ。」

「なるほど。」

「そしてドイツ哲学だ。ここにも二つ流れがあったのよ。一つは19世紀初めのドイツ哲学界の大御所ヘーゲルの弁証法的観念論ね。もう一つは、ヘーゲルの死後、彼を批判して1830年代ぐらいに流行ったヘーゲル左派、特にフォイエルバッハの唯物論的疎外論だ。ヘーゲル哲学はね、とても一言で説明はできないけど、まあ、理性がエラって考えよね。だから『観念論』って言われるの。人類に共有されている理性がね、どんどん普遍的になっていく。『普遍』って言葉は昨日教えてもらったよね。身分や民族や時代を超えて、みんなにあてはま

るように発展していく。そういう理性普遍化の歴史が人類の歴史だって言ったの。でもその理性は、現実を実現するときに、いろいろ現実界の物質的な制約を受けて、理性どおりには実現できなくて、矛盾した姿に歪曲される。これをヘーゲルは『疎外』と言ったわけだけど、そうした疎外を生みながら、しかし長期的にはそれを克服して理性が貫くんだと言ったわけ。」

先生は、「疎外」と言うとき、「ソ」にアクセントを置く。たぶん、普通に「ガ」にアクセントを置いたら、「仲間はずれ」といった意味の日常用語になっちゃうんじゃないかな。

「ところがこのヘーゲルの考えを真っ向から批判したのがフォイエルバッハだ。理性がエライなんてとんでもないというわけよ。ホントに大事なものは、一人一人の生身の人間。個々人の『感性』だっていうわけ。『感性』ってのはまた哲学用語だけど、本能とか欲求とか身体とか暮らしの事情とかそんなのを指していると考える。それで、フォイエルバッハは、ヘーゲルの使った『疎外』って意味をひっくり返して、全然正反対の意味に使いだしたの。『理性』ってのは、本来は個々人の『感性』を満たすための手段にすぎない。にもかかわらず『理性』は生身の人間を離れて一人歩きして、それ自体が目的みたいになって、個々人の『感性』を抑圧してしまう。はなはだしくは、平気で命をも奪う。これこそが『疎外』だ。おかしいじゃないか、と言うわけよ。」

「うん。おかしいです。アタシもそう思います。」

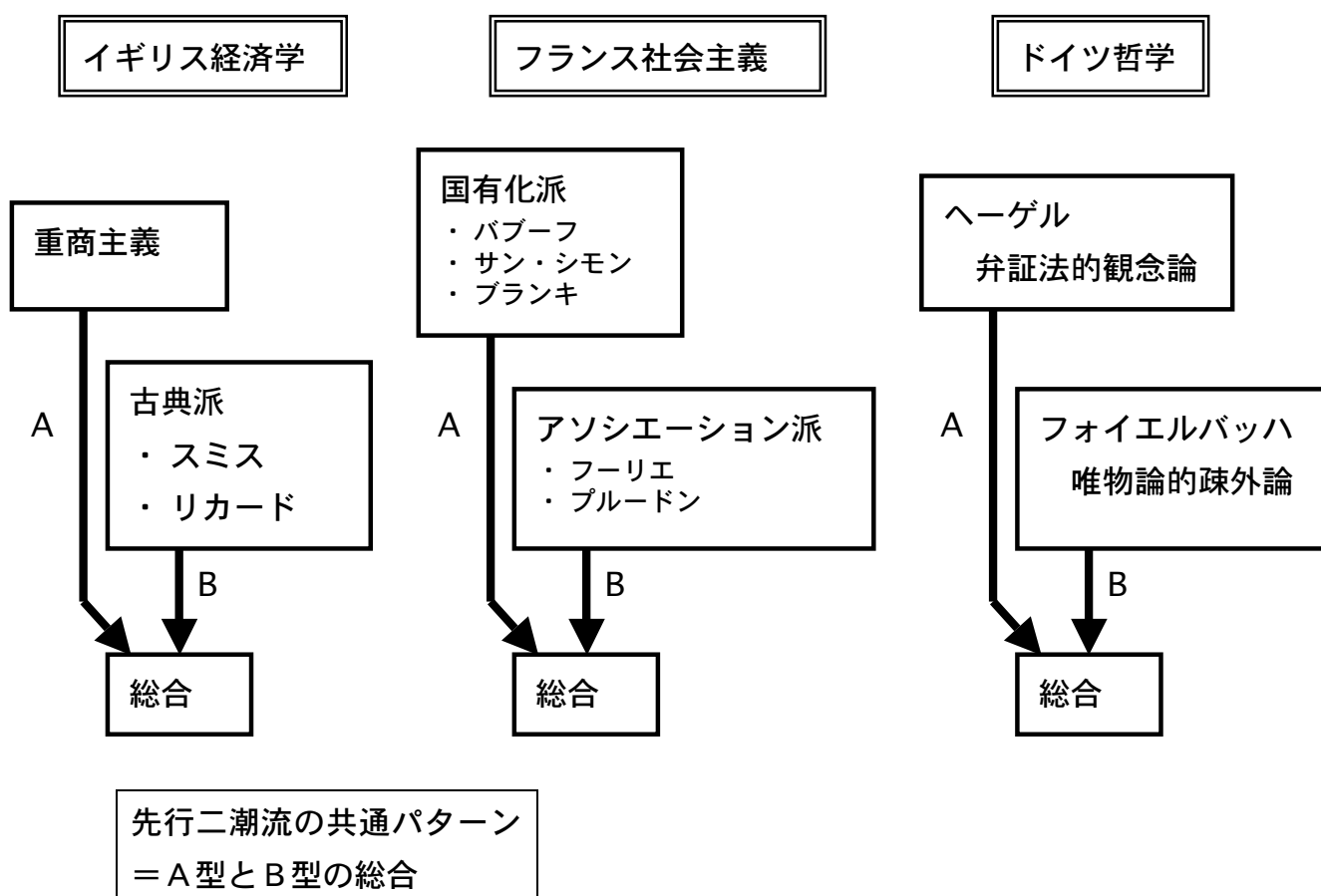
「じゃああなたも唯物論的疎外論者だわ。マルクスも基本的にはこの立場を引き継いでいるの。おカネが神様みたいになっちゃう問題の分析とか、資本が人間を組み伏せてどんどん膨らんでいく描写とか、マルクスの議論はいたるところこのフォイエルバッハの疎外論の図式になってるのよ。詳しくは、松尾匡の『「はだかの王様」の経済学』（東洋経済新報社）って本に書いてあるから、興味があったら是非読んでみてね。…しかし、マルクスはヘーゲルの立場も取り入れている。どんな論点かわかる？」

「わかります。ヘーゲルの『理性』の代わりに、『資本主義』がきてる。資本主義が世界を普遍化していくという見方ですね。そしてその、資本主義市場経済のもたらす世界の普遍化、均衡的な仕事の配分とか公正な取引とかいろいろプラスのことが、短期的には、景気変動みたいに、いつもそれと矛盾する歪曲された姿で現れるってところが、ヘーゲル流の疎外にあたるのですね。」

「そのとおり。ただ注意してね。この点でヘーゲル流の疎外がなくなって、資

本主義市場のもたらす世界の普遍化とか均衡的な生産配分とかが直接ナマで実現したとしても、それ自体が一人一人の生身の人間を勝手に離れてひとり立ちしているものなわけだから、フォイエルバッハ流の疎外の図式があてはまるのよ。やっぱりそのもとで労働者は納得なく搾取されるわ、職人技も伝統文化も納得なく壊されるわで、個々人は抑圧されちゃってる。そういう大枠の仕組みに対するフォイエルバッハ疎外論の見方からの批判があった上で、あくまで二義的な歪曲への批判という意味で、ヘーゲル的疎外の図式が使われているの。」

図 3-1 「マルクス経済学の三つの源泉」での総合



そう言うと、先生はまたホワイトボードに向かい、イギリス経済学の重商主義のところと、フランス社会主義の国有化派のところと、ドイツ哲学のヘーゲル弁証法的観念論のところと、それぞれ「A」と書き込んだ。そしてさらに、イギリス経済学の古典派のところと、フランス社会主義のアソシエーション派のところと、ドイツ哲学のフォイエルバッハ唯物論的疎外論のところと、それぞれ「B」と書き込んだ。

「さて、このAと書いたものに共通するものは何かな。それと対比して、Bと書いたものに共通するものは何かな。」

「共通するものですか。例えば…」

「例えば、A型は理性的、B型は感性的。」

「……」

「……」

「先生！いくら降霊じいさんがいるからと言って、先生までトンデモ話に手を染めないで下さい。しかも『マイナスイオン』とか『ありがとうの水』とかならまだネタってわかりますけど、血液型占いはマジで信じる人がいますから、シャレになりませんよ!!」

「ごめんごめん。たまたまあてはまったシャレよ。」

「しかも、重商主義が『理性的』って表現はいまいちぴったりじゃないしい。むしろA型が意識的、B型が自然発生的って表現にした方がいいと思います。」

「なるほど。ほかには？」

「えーと、A型が『お上』っぽくて、命令を下す立場。B型が『下々』っぽくて、現場を重視する立場。」

「事件は現場で起こってるんだっ！なるほどそうよね。…それでね、マルクスはこの二つの立場をどう総合したかと言うと。基本的にはB型を引き継いでいるわけね。だから、本質的、究極的、長期的にはB型の立場があてはまると思っているみたいね。それに対して、現象的、手段的、短期的にはA型の立場があてはまる。こんなふうに総合したの。…もっとも、従来のマルクス解釈では、ちょっとA型の方に重きを置きすぎてたと思うわ。私は、マルクスの考え方というものは、普通考えられているよりもずっと、B型に重きを置いて解釈されるべきだと思っています。」

「マルクス解釈を離れて、先生ご自身はマルクスのこのA型とB型の『総合』についてどうお考えですか。」

「うーん、難しいわねえ。マルクスの『総合』はね、はっきり言って、理論的に完成していないと思うのよね。特に経済学についてはそうよ。『資本論』で主に分析されているのは、長期均衡体系で、短期的な不均衡の分析は本格的には手がけられていなかった。ましてや、両者の間の関係の分析など、全然手つかずよ。そしてそんなことはその後も誰もやっていない。長期均衡体系を数学的に厳密に分析した研究はいっぱいあるし、短期不均衡的体系を数学的に厳密に

分析した研究もたくさんあるわ。でも、短期的な不均衡の動揺を長期的に平均したら、長期均衡体系が設定できるといったことを、数学モデルで厳密に説明することは、おそらくまだ誰もやっていないと思う。でもこれができないとマルクスの経済学の現代化は完成しないと思うわ。」

「よくわからないけど、それって結構難しいことなんでしょうね。先生は、そんなふうにしてマルクスを現代に活かすことの意味は何だとお考えですか。」

「そうね。よく最近マルクス復活とか言われるじゃない。資本主義が19世紀当時に先祖帰りしていて、企業の都合だけで労働者が使い捨てられてる。保障もない低賃金で苦役に耐えるワーキングプアが増えている。正社員も過労死寸前までこき使われているし…。それで、マルクスの資本主義批判の視点をもう一度って言われたりするんだけど…、ちょっと苦笑しちゃうわねこんな風潮。」

「はあ…。何かいけないことでも。」

「資本主義がけしからんとか、弱肉強食の現実はけしからんとか、そんなことなら誰でも言えることよ。でもそんなこと言うだけで問題を解決してみんなの境遇を改善できるかって言えば疑問だわ。マルクスを学んで一番わかることはね、彼は体制をひっくり返そうという立場にいたにもかかわらず、当時の押しも押されぬ支配体制側の主流派経済学のリカード経済学を一生懸命勉強して、それをすっかり自分のものにして議論しているということよ。そして、いろいろな社会問題を究明するのに、悪者探しをして不正な企みを暴こうなどという基本姿勢はとらなかった。あくまで原則は『経済学的発想』に立って、そんな問題がもたらされる、人為を離れた客観的仕組みを分析しようとした。そしてね、実はちょっとした違いで人の悪口言い立てるから性格的には結構問題がある人なんだけど、でもそんなことを言いながら、本当は自分に先行する他人の議論を取り入れることにどん欲だった。しかも、そこに互いに対立する潮流があったとき、対立に目を奪われて片方だけについてもう片方を切り捨てるのではなく、中途半端な折衷をするのではなく、両方ともを徹底的に検討して、ひとつの体系の中に総合しようとした。こんなふうにしてそのときまでの人類の英知を総合したからこそ、巨大な影響力のある学説を作り出して、この世の中が少しでもましな方向に動くために貢献したんだと思うわ。…今、資本主義の現状を批判している人達に、往々にして一番欠けているのは、こういう姿勢だと思うのよ。だからこそ、まさにこの点で、今マルクスを学ぶ意義があるのだと思っています。」